集落遺産における賑わいの創造

――広島県御手洗を事例として――

M031610　中　岡　志　保

1．研究の背景と目的

本論文は，わが国の文化政策である重要伝統的建造物群保存地区に選定されている広島県御手洗（大崎下島）に焦点を当てる。御手洗は港町として栄えた町並みを残し，現在では観光地としての一面を持つ一方で県下最高齢地域でもある。そのような地域の実態は観光地としての町並みの華やかさばかりが表面化し，地域住民の生活や町並みに対する価値観はあいまいなものである。

そこで御手洗を集落遺産と捉え，住民や周囲に住む人々，観光客はどのような評価を行うのかということを明らかにし，その集落の持つ文化的価値を評価することを目的とした。

2．研究方法

御手洗の景観や町並みを維持していくための負担意思額を回答してもらう面接方式のアンケートとその金額の裏づけとしての聞き取り調査を行った。その際，御手洗の現状を前段階で提示した。アンケート結果から回答者の加重平均値と負担意思額を求め，CVMにより評価を行い，現在までの観光振興事業への助成額と照らし合わせながら観光の実態を把握することを試みた。また，周辺住民や他の保存地区を有する２集落（広島県竹原市，島根県大森銀山）においても同様のアンケートとヒアリングを行い，御手洗との比較検討を行った。

3．結　果

3－1　文化的価値の市場

アンケートによるCVM分析の結果では，御手洗における自営業者の負担意思額は低く，文化的価値の市場性は評価されていないものであった。対照的に竹原や大森銀山における自営業者は町並みや景観を自身のためにも資力を注ぎ保存活動を行っていた。

3－2　御手洗住民と保存地区

御手洗住民の多くにとっては単に住まいとしての集落であった。また観光化はごく一部の住民によって行われていた。

3－3　助成と地方

御手洗の観光振興へ助成は多大なものであったにもかかわらず，それによって利益を得ているのは一部の住民に限られていた。それによって多くの住民は不満を抱き，自治体は混乱状態にあった。条件不利地域では公的助成が一般に行われているが，地域活性化にはつながっていないように思われる。

3－4　CVMによる評価

御手洗におけるCVMでは5,300円という結果が得られ，それくらいであれば年間１世帯当りで負担する意思があるという結果になった。またそこに観光客の負担意思額も加えた回答者の総負担意思額は年間30万円程度となった。

4．考察と今後の課題

御手洗のような条件不利地域における今後望まれる姿は，住民がよりよく生きるための自治体運営を行うことで，それにより集落遺産としての御手洗は持続可能なものとなりうると思われる。またそこにはよき理解者としての訪問者による支援も望まれるのではないだろうか。

今後はそのような訪問者との関係構築には欠かせない女性の貢献が見落とされているということに焦点をあて，研究してゆくこととしたい。